

# 野坂昭如「火垂るの墓」再評価

——作品末尾の改変をめぐる——

## 要旨

野坂昭如「火垂るの墓」は、初出と、初刊とで本文末尾に異同（削除と加筆）が認められる。

「火垂るの墓」は、反戦を訴える作品として一般的に受容されてきた。

文学研究の分野では、作者の実妹への鎮魂と贖罪が主題であると捉えられてきた。しかし、本作末尾の加除を考慮したとき、そのような評価は、転換を迫られる。

本稿では、「戦災孤児等保護対策要綱」に対する今までの誤認を指摘するとともに、作品末尾にみられる加除に注目することで、反戦文学として読まれてきた「火垂るの墓」を、実妹への鎮魂と贖罪という枠組みを超えた新たな読み

を提示しようと思う。

徳永 淳

キーワード：「野坂昭如」・「本文異同」・「戦災孤児等保護対策要綱」・「日付」・「作品末尾」

## 一 作品と研究史

### （一）作品の概要について

「火垂るの墓」は、昭和四十二（一九六七）年十月、『オーラル讀物』に掲載された。昭和四十三（一九六八）年三月、『アメリカカひじき』、「火垂るの墓」、「焼土層」、「死児を育てる」、「ラ・クンパルシート」、「プアボーイ」の六つの短篇を所収して『アメリカカひじき 火垂るの墓』として文藝

春秋より刊行された。

その後、『アメリカカひじき 火垂るの墓』は、昭和四十七（一九七二）年一月に新潮文庫として刊行された。以後、カバーの装丁が二回変更されているが、この新潮文庫版『アメリカカひじき 火垂るの墓』が定本となっている。

なお、本稿の本文引用は、定本である新潮文庫版『アメリカカひじき 火垂るの墓』からのものである。

昭和六十三（一九八八）年、「火垂るの墓」はスタジオジブリの高畑勲氏を脚本、監督にしてアニメーション映画として劇場公開された。

物語は、昭和二十年九月二十一日、兵庫県省線三宮駅構内浜側において十五歳の少年清太が死ぬことで始まる。その後、同年六月五日の「神戸大空襲」、八月十五日の太平洋戦争終戦を経て、九月二十二日、清太が茶毘に付されて物語が結ばれる。

「神戸大空襲」の回想は、四歳の妹節子を背負い、避難すること始まる。清太、節子兄妹は別の壕へ避難していた病身の母の死によって、父親の従弟の嫁の実家に身を寄せる。遠い親戚である未亡人は清太兄妹に嫌味を言いつつ一部屋を与える。最初は罹災者に充てられる特配等もあり、食べるに困らない状況であった。しかし、罹災者特配もなくなり、食糧の不足を懸念した未亡人は、清太兄妹に

亡き母の着物を売るよう促す。清太兄妹は、未亡人の待遇に耐えかねて、彼女の家を出る。清太兄妹は、コの字に掘られた横穴壕に居を移し、二人で生きようとするも、やがて食べ物も底をついてしまう。妹の節子は栄養失調になり、八月二十二日、清太が貯水池で泳いで壕に帰ると絶命していた。清太は、市役所に火葬を依頼するも満員で断られ、焼き方を教えられる。自身の手で妹を茶毘に付した清太は、その後、廃人の如く気力を喪失したまま絶命し、九月二十二日、布引の上の寺で茶毘に付される。

## （二）アニメーション映画『火垂るの墓』の捉えられ方

團野光晴氏によればアニメーション映画『火垂るの墓』は、平成元（一九八九）年から平成十五（二〇〇三）年までの十五年間で七回に亘って日本テレビ系、金曜ロードショーで放映された。七回の放映は全て終戦の月、八月である（一）。このことから、視聴者に戦争を意識させるために『火垂るの墓』が放映されていると考えられる。終戦の月に『火垂るの墓』で描かれる幼い兄妹の死は、戦争によって引き起こされた惨禍を視聴者に強く印象づけるのではないだろうか。『火垂るの墓』の監督である高畑勲氏は、エッセイの中で、

『火垂るの墓』をみて、圧倒的多数の方々がそのなかに「反戦」のメッセージを読みとってくださったようなのです。

小学生からは、戦争はこわい、主人公の兄妹がかわいそう、その死に強い印象を受けた、戦争は悲惨だ、絶対にしてはいけないなど、単純だが素直な反響が全国的にありました。最前列で観ていた中学生の男の子たちが声をあげて泣いていた。観て来た子供が父親にヴィデオを借りてもらって一緒に観ながら解説をするのだけど途中から涙ぐんで黙ってしまった、など、大人も子供も泣いた人が非常に多い。そして「反戦映画」だと受けとめておられるのです。(2)

と述べている。また、

「火垂るの墓」は、野坂昭如の原作を知っているので覚悟はしていたのだが、死んで安らぎを得た兄妹を包むホタルの群れからカメラが遠ざかり、それが現代の高層ビル街の灯に変わるラストで、突然に涙があふれてきたのには我ながら驚いた。日本でも、子供が飢え死にした時代があった。しかも、それはほんのちょっと前でしか

ないのだ。(3)

という読売新聞の文化欄の記事は、『火垂るの墓』が一般的に戦争の惨禍を訴える「反戦映画」として受容されている証左であろう。

しかし高畑氏は、反戦のメッセージを伝えようとして「火垂るの墓」を映画化しようとしたのではない。「隣組や意地の悪いおばさんから逃げだ」す清太の気持ちに「人間、辛抱だ」というのは大嫌いで、人間関係のしがらみや争いは出来るだけ避けようとする当時の若者が共感すること、「戦争と人の心、そして人々のつながりを考える糸口のようなもの」を見出してもらうことを高畑氏は、当初の目的としていた(4)。

また、原作者である野坂は、

ぼくは、作中の少年ほど、妹にやさしくはなかったし、いかに小説とはいえ、周辺の大人たちを、ずい分悪く書いていたのだ。いわば、お涙頂戴式のおもむきがあつて、申し訳ないというだけではすまない、といって罪の意識と大袈裟なものでもない。もし、かわいそうな戦争の犠牲者の物語に仕立て上げられたら、なおぼく自身、いたたまれない(5)

と述べており、高畑氏のエッセイにある視聴者の印象と乖離が見られる。

このように、アニメーション映画『火垂るの墓』は、作者、監督の意図を超えて「反戦映画」、「戦争の犠牲者の物語」として一般的に受容されてきた。

(三) 亡き妹への贖罪と鎮魂の「お涙頂戴」物語という認識が作品の真意を暈す

上記のようにアニメーション映画『火垂るの墓』は多くの人の涙を誘い、戦争が引き起こす惨劇の物語、兄妹の愛情物語として一般的に受容されてきた。

しかし、この戦争が引き起こす惨劇の物語、兄妹の愛情物語として「火垂るの墓」が捉えられるのは、アニメ劇場公開される以前からであった。

それは、「火垂るの墓」発表前である昭和四十二年一月に『婦人公論』に掲載された「プレイボーイの子守唄」という野坂のエッセイが影響しているためであろう。「プレイボーイの子守唄」によれば、野坂の太平洋戦争による被災体験と飢餓体験、一歳三カ月の妹恵子との死別に至る経緯が「火垂るの墓」の下敷きとなっている。「火垂るの墓」

を栗坪良樹氏は、

「火垂るの墓」には、作者の戦争体験が、知らず知らず詠嘆的に語られている傾きがある。そして、その詠嘆はけつしてオーバーなものではなく贖罪的であり、かつ鎮魂的でもある。何に對してと言えば、それは作者の〈妹〉に對してと言ふことになるうし、それに違いない。

(6)

と述べ、妹恵子に對する贖罪と鎮魂を目的として読んでいゝる。また、菊池昌典氏は、

日本共同体の崩壊は、二人の子供だけの運命共同体をも、餓鬼の世界になげこみ、世間から見捨てられた兄妹を食物をめぐるあらしに駆りたてたのである。(中略) 事實は、家庭の単位のなかでも、餓飢の修羅場は隠湿な形をとって、進行したのであった。そのことへの痛みが、野坂をして、傑作「火垂るの墓」を生ましめたのである。

(7)

と述べており、「火垂るの墓」を野坂の戦争体験の中に兄妹の愛情が込められた作品として捉えてきた。栗坪氏の論

文は昭和四十七（一九七二）年、菊池氏の論文は昭和四十九（一九七四）年のものである。これらの論文は、「火垂るの墓」研究史において初期のものである。しかし、このような読みは現在でも継続されている。それは、平成二十七（二〇一五）年に大堀敏靖氏が、

「火垂るの墓」の中では主人公清太は四歳の妹節子の世話を兄らしく懸命に行っている。栄養失調で亡くなってしまった妹を茶毘にふし、その白い骨をドロップ缶に入れて自らが亡くなるまで離さなかった。清太のモデルである実際の野坂は赤子の妹をむしろ煩わしく思うばかりだったようだが、うしろめたい気持ちはこの作品を書くことによって昇華させようとしたのだろう。この場合真実は違うというようなことは問題ではなく、野坂がこういう作品を書いたということが重要で、こうあるべきだったという理想型が野坂の中にあつたからこそ作品は生れたということに注目しなければならぬだろう。

(8)

と述べていることから証明されるのではないだろうか。

以上のように「火垂るの墓」は、野坂による妹恵子に対しての贖罪と鎮魂が最大のテーマであると捉えることが定

説とされてきた。若しくは、米村みゆき氏のように「清太のような浮浪児が三宮構内の支柱ごとに座り込んでいる描写に、この話が戦中・戦後のありふれた悲劇」<sup>(9)</sup>として、戦争の凄惨さとその背景にある歴史を顕現した小説と読まれてきた。

これらは、「あの昭和二十年の夏、十四歳の少年が、一年三カ月の赤ん坊を、育てられなかつたからといって、別に気にやむことはないだろう。恵子の運がわるかつたといえどそれまでだが、しかし一年三カ月の赤ん坊の食物のピンをはね、その頭をブンなぐつた記憶はなくなるものではない。泣きつばなしで死んでしまった女の子なんて、あまりにかわいそう過ぎる。ぼくは恵子のことを考えると、どうにもならなくなってしまうのだ。」<sup>(10)</sup> また、「中学生に、『火垂るの墓』を執筆した時の、作者の心境はどうだったかなどと、推測させる必要はない（中略）戦争の惨禍と関係なく、兄妹の愛情物語と読んでいただければ作者として幸せ。」<sup>(11)</sup> といった野坂のエッセイの言葉を根拠にしたものであると考えられる。

確かに野坂の述べた言葉を辿る程、彼の亡き妹、恵子に対しての悔悟の念は、強く感じられる。野坂の実体験とは違って清太は、妹節子に対して最期まで、献身的であった。野坂の成し得なかつた行為を清太に託すことで妹恵子に対

して贖罪と鎮魂を目的としていたことは、間違いないだろう。

しかし、贖罪と鎮魂のみが目的であるならば、節子が死ぬまで献身的に尽した清太を描くだけで、十分だったのではないだろうか。清太までも死に至らしめる結末を用意する必要があったのだろうか。この点に疑問が生じる。

#### (四)「戦災孤児等保護対策要綱」についての誤読

以上のように「火垂るの墓」は妹への贖罪と鎮魂を目的としていると読まれつつ、それに並行して戦争によって引き起こされる惨禍を表していると読まれてきた。

例えば、岩佐壯四郎氏は「父の従弟の嫁の実家」を（身内）と（他人）の境界というより、（他人）に属すると前提している。その上で、遠い縁故にすぎ、「父の従弟の嫁の実家」に寄寓する清太兄妹の扱われ方の変遷から「戦争は、地縁とか血縁によって結ばれる共同体を引き裂いた。というより、平和な時代には、地縁とか血縁という言葉が蔽い隠している関係を剥き出しにしてみせた。」<sup>(62)</sup>として伝統的な共同体の崩壊と呼んだ。その崩壊とは、日本という共同体の崩壊を意味し、この共同体を基盤にした文化の崩壊であると論じた。前掲した菊池氏の論も併せる

と、清太兄妹の死に至るまでの食べ物を巡る争いは戦時下という特殊な状況によって生じたものであり、その争いは、日本共同体、日本文化の崩壊に帰結しているとして、「火垂るの墓」を捉えているのである。

また、團野光晴氏も清太兄妹の「父の従弟の嫁の実家」で展開された食べ物を巡る争いから「戦況の悪化と食糧不足のため、すでに戦時下において戦後の「焼跡闇市」的な弱肉強食の風潮が、隱微に蔓延している」<sup>(63)</sup>として、エゴイストの象徴に未亡人を位置づけ、共同体の崩壊を論じている。更に「いっそ節子さえおらなんだら」という清太の言葉から彼自身がエゴイズムに駆り立てられるが、それを打破したヒューマニズムであるとしている。この清太が「焼跡闇市」的な弱肉強食の世界に敗北し、無縁仏として名前も個性も喪失する。ここに戦争という惨劇が兄妹愛を貫こうとするヒューマニズムを破壊する機能を持つとして「火垂るの墓」を論じている。「焼跡闇市」という戦争特有の文化とその中で顕現する人間のエゴイズムが、（人間らしさ）を破壊するとしている。

また、團野氏は「焼跡闇市」に注目したが、「戦災孤児等保護対策要綱」という法案に注目するものも見受けられる。昭和二十年九月二十二日という詳細な日付と伴に「戦災孤児等保護対策要項」成立の次の日が清太の命日である

という描写は、読者に深い印象を与える。

前掲の米村氏は「妹節子が終戦の一週間後に死に、清太はその敗戦の一ヶ月後「戦災孤児等保護対策要綱」の決定がなされた翌日に死亡する設定には、戦争が敗戦による終焉を意味しないこと、生き延びた清太である野坂が〈戦後〉という時代の中で、何を受け入れ、何と向き合ってきたのかを考えさせる仕組みになっている。(傍点は原文のまま)」<sup>(47)</sup>と解説している。

ここには、八月十五日で戦争が終わったのではなく、「戦災孤児等保護対策要綱」が成立施行された今日でも悲劇は幕を下ろしていないという解釈が読み取れる。もう一步踏み込んで言えば、終戦してから一ヶ月という間、戦災孤児への対策を講じなかった社会の怠慢さを訴えている、と読むことさえできる。

中島康二氏は、「戦災孤児等保護対策要綱」について「もう少し決定が早ければ、清太は死ななかつた」「もしくは「決定したにも関わらず、要綱が効果的に機能しなかつたばかりに清太は死んでしまった」と述べている。この「戦災孤児等保護対策要綱」決定の日付、そして清太の死んだ日付にこそ、清太が作中において、死ななければならなかつた意図というものを見ることができよう。」<sup>(48)</sup>と述べている。

このように「戦災孤児等保護対策要綱」を、清太や他の戦災孤児への救済と位置づけて読むことは多くの読者の共通するところであると思う。

しかし、「戦災孤児等保護対策要綱」の実態は、

昭和二十一年当初浮浪児はまだ大した数ではなく月二、三回の一斉收容に毎回四、五〇人の程度で大部分は本院に收容したが、施設の不備、処遇の関係等でその多くは直ちに逃亡するものが続出した。このため一時は大島に隔離收容する案を樹て、同年二月末現地視察を行ったが、地元の反対にあい実現できなかつた。<sup>(49)</sup>

というものであつた。また、石井光太氏は、浮浪児を取らしつつ、孤児院の実態を、次のように述べている。

初期の孤児院の多くは、浮浪児の收容を目的としていた。特に都や県が運営している公立の施設はそうだった。だからこそ、施設側は子供たちの脱走を防ぐために窓に鉄格子をはめて、ドアを二重、三重にして鍵をかけることもあつた。

浮浪児たちの間で評判が悪かつたのが、「東水園」だ。一九四六年に東京湾の芝浦岸壁から八八〇メートルの海

上、今のお台場にあった東京水上警察署第五台場見張所を利用して建設された離島のような施設で、四方を海に囲まれているため、一度船で運ばれてしまえば、自力で抜け出すことはできなかった。

そんなことから浮浪児たちは、ここに送られることを「島流し」と呼んでいた。島の施設は陸の施設同様に極度の食糧不足に陥っており、子供同士のいじめや、職員からの乱暴も横行していた。子供たちの中には泳いで脱走を図ろうとする者がいたが、途中で潮に流されて溺死するという事件も起きていた。(11)

これらの資料は、孤児院の環境がいかに劣悪であったかを如実に物語っている。

〈語り手〉は清太の死について詳細な日付を冒頭と作品末の二回に亘って語り、読者に「戦災孤児等保護対策要綱」を強く印象付けている。野坂はこうした孤児院の実態を知悉した上で「戦災孤児等対策保護要項」を作品に書き込んだと考えられる。

その証左として、野坂は、

僕自身が死を一番意識したのは、終戦後、生きるために盗みをやって捕まり、少年院に送られたとき。そこは

戦争孤児の吹き溜まり、飢えにさいなまされ、朝起きると一人は死んでいるという毎日だった。隅の桶にうんこをするのだが、後ろを向いて他の奴に「おい、肛門見えるか」と聞く。肛門が見えるということは、つまり筋肉が落ち脱肛状態になることで、見えたらおよそ四、五日で死ぬことになっていた。このままここにいたら僕は死ぬ。じわじわ来る飢え死にの恐怖……(12)

と述べている。戦争孤児は「保護」されているのではなく、「収監」され、飢えの中で死を待っていたのだ。

この実態に基づいて考えれば、「戦災孤児等対策保護要項」が成立、施行されたとしても清太の絶命する場所が変わるだけだったのではないだろうか。「戦災孤児等保護対策要綱」が施行されれば、清太が救済されたと読むことは、法案の名称に誘導された安直な解釈ではないだろうか。

このように、清太が「戦災孤児等保護対策要綱」決定の翌日に絶命するという悲哀を誘う設定に引きずられて「火垂るの墓」は、反戦文学として捉えられてきた。しかし、それらは、清太の絶命がどのような意味を持っているかを論じているに過ぎない。本稿では、「火垂るの墓」に見られる作品末尾の初出と初刊の本文異同に注目しつつ、その

加除がどのように読みを転換させるかを考察していく。

- 二 「火垂るの墓」に見られる初出と初刊の本文異同
- (一) 「火垂るの墓」の加除

「火垂るの墓」は、『オール讀物』に掲載された初出のものと、初刊である単行本『アメリカカひじき・火垂るの墓』所収のものとで、作品末尾に加筆と削除が認められる。

昭和二十年九月二十二日午後、三宮駅構内で野垂れ死にした清太は、他に二、三十はあった浮浪児の死体と共に、布引の上の寺で茶毘に付され、骨は無縁仏として納骨堂へおさめられた。

右の文章は、定本の「火垂るの墓」作品末である。物語は、清太が茶毘に付され、個人としての名前すらも奪われた形で結ばれる。これに対して初出の作品末は次のようになっている。

三宮駅構内で野垂れ死にした清太は、他に二、三十はあった浮浪児の死体と共に、布引の上の寺で茶毘に付され、骨は無縁仏として納骨堂へおさめられた。

その夜、布引の谷あいの螢、無数にとび立ち、一筋の流れとなり、三宮駅浜側の夏草のしげみに流れおち、くさむら一面無数の螢火にかざられたという、うち捨てられた節子の骨を、守るようにあやすように。(6) (傍線は、論者による)

このように傍線部が削除され、冒頭部に詳細な日時を加筆したものが定本となっているのである。

「火垂るの墓」を最初に読んだ『オール讀物』元編集者の鈴木琢二氏は、作品末尾の加除を指摘しつつ、加筆の理由に関しては留保しつつも、削除の理由に関しては、海音寺潮五郎の

不思議な才能である。大坂ことばの長所を利用しての冗舌は、縦横無尽のようでありながら、無駄なおしゃべりは少しもない。十分な計算がある。見事というほかはない。前者に使われている材料はほくの好みではないが、描写に少しもいやしさがなく、突飛な効果が笑いをさそぐ。感心した。後者の結末は明治調すぎて、古めかしすぎて乗っていけなかったが、自伝的なものがありそうだから、こうせざるを得なかったであろう。(6)

という直木賞の選評を受けて野坂が削除を施したと推測している<sup>(31)</sup>。しかし、作品末尾の一段落は、「火垂るの墓」という題を強く表現している箇所と捉えられる。更に、作品末尾の一段落こそ野坂の実妹への悔悟の念を表出する為に重要な箇所である。それを削除することは、彼の実妹に対する贖罪、鎮魂の念を超えて為された操作であるという解釈を迫るものであるといつてよいのではないだろうか。

## (二) 削除された節子の死

鈴木氏は、海音寺の直木賞選評に作品末尾削除の原因があると推測したが、他の選考委員である石坂洋二郎氏は、「野坂昭如氏の二作のうち、私は「火垂るの墓」がいいと思った。／この題材では「婦人公論読者賞」に選ばれた二つの作品に感心させられたが、こう短くきれぎれに書かないで、この題材で長篇を書かれたら——と残念に思った。」<sup>(32)</sup>と述べている。また、源氏鶏太氏は、「今回の二作については文句のつけようがなかった。」<sup>(33)</sup>と絶賛しており、他の選考委員も、好評価を下している。

海音寺氏も作品末尾こそ批判したものの選評の内容では、賛辞を述べている。選考委員全員が好評価を下す中で、海音寺氏の批判一つを受けて削除したと考えるのは、論拠

が乏しいのではないだろうか。

作品末尾の変更は、作品全体の評価、解釈の転換を迫るものである。

野坂がエッセイで述べているように実妹に対する贖罪と鎮魂が主たる目的であるならば、節子の靈魂を鎮めるかのような描写となっている作品末尾の一段落は、必要であろう。

初出作品末尾を削除した場合「火垂るの墓」は、清太が無縁仏として茶毘に付されることで結ばれる。即ち、節子の死ではなく、清太の死で作品が完結する。團野氏は、「他に二、三十はあつた浮浪児の死体と共に、布引の上の寺で茶毘に付され、骨は無縁仏として納骨堂へおさめられた」ことから、清太もまた「名前や個性も」喪失して「二、三十」の「浮浪児」の一人に組み込まれた<sup>(34)</sup>と述べている。作品末尾の削除を踏まえて論じたものではないが、團野氏による清太の死の捉え方は、妥当であると考えられる。

作品末尾の削除は、「火垂るの墓」を餓死した哀れな妹への贖罪の物語のみならず、妹思いの少年の死の物語という面も浮き彫りにする。そして、清太は「二、三十はあつた浮浪児の死体と共に」「無縁仏」となり、個性を喪失する。それは、作品が清太節子兄妹の固有の物語で留まるこ

とを許さない。清太の死を多くの戦災孤児の一人の物語に拡大させるのである。

(三) 加筆された詳細な日時

「火垂るの墓」は、

何日なんやろな、何日なんやろかとそれのみ考えつつ、清太は死んだ。

その前日、「戦災孤児等保護対策要綱」の決定された、昭和二十年九月二十一日の深夜で、おっかなびっくり虱だらけの清太の着衣調べた駅員は、腹巻の中にちいさなドロップの缶をみつつけ出し、(中略)ドロップの缶もて余したようにふると、カラカラと鳴り、駅員はモーションつけて駅前の焼跡、すでに夏草しげく生えたあたりの暗がりへほうり投げ、落ちた拍子にそのふたがとれて、白い粉がこぼれ、ちいさい骨のかけらが三つころげ、草に宿っていた蛍おどろいて二、三十あわただしく点滅しながらとびかい、やがて静まる。

というように詳細な日時を記して清太の死を語ることで始まる。その後(語り手)は、昭和二十年六月五日の神戸大

空襲にまつわる回想を語り、「母の長じゅばん腰ひもがまるまっていたから、拾い上げ、ひっかついで、そのまま壕にはもどらなかつた」以降の清太の動向を、冒頭部に照応させ、「三宮駅構内で野垂れ死にした清太」の死後について語る。作品末尾において時空を冒頭部に引き戻すことで「火垂るの墓」という物語は、円環の構造を成していることが分かる。

初出「火垂るの墓」は、清太の死を語ることで冒頭部の時空に還る。定本「火垂るの墓」も、「昭和二十年九月二十二日午後」という明確な日時を記すことで冒頭部に読者を引き戻す。

最終段落に日付を記すことは、冒頭部で清太が絶命した日付と対応して神戸大空襲にまつわる回想を明確にする。二つの日付によって枠に囲まれて浮かび上がった回想部は、読者に清太の死をより鮮明に刻みつける。

また「火垂るの墓」は、冒頭部「草に宿っていた蛍おどろいて二、三十あわただしく点滅しながらとびか」つた蛍と、茶毘に付される「浮浪児」の数が対応していることが印象的である。清太と「二、三十」の「浮浪児」を何時、茶毘に付したかが曖昧になっていた初出は、清太の死体がいつまで放置されていたかも曖昧にする。清太の絶命から茶毘に付されるまでの時間が経過するほど「浮浪児の死

体」は、増えていく。即ち、最終段落で「浮浪児の死体」は、「二、三十」を超えて増加していくのである。

冒頭部「草に宿っていた蛍おどろいて二、三十あわただしく点滅しながらとびか」った蛍と最終段落で「他に二、三十はあった浮浪児の死体」を照応させて鎮魂するには、茶毘に付す日時を清太絶命の翌日にせねばならなかったのではないだろうか。

### 三 おわりに

「火垂るの墓」の初刊に際して施された加筆は、作品の構造を明確にした。作品末尾における削除は、戦争の惨禍に見舞われたのは清太兄妹だけではなく、数多い被災孤児たちの一部に過ぎないことを示し、野坂個人の妹に対する鎮魂の物語から、被災孤児たちへの鎮魂の物語へと昇華させた。それは、清太兄妹固有の物語から被災孤児全体の物語へと拡大を迫るものであった。

同時にそれは、実妹への鎮魂、贖罪小説であった野坂昭如個人の問題から「火垂るの墓」を解放することでもあったのではないだろうか<sup>(9)</sup>。

### 註

- (1) 團野光晴「『国民的映画』の成立 映画『火垂るの墓』と戦争の『記憶』」
- (米村みゆき編著『ジブリの森へ』二〇〇八年四月 森話社)
- (2) 高畑勲「映画を作りながら考えたこと」
- (『映画を作りながら考えたこと』一九九一年八月 徳間書店)
- (3) 文化欄「スクリーン」火垂るの墓(新潮社)となりのトトロ(徳間書店)
- 叙情性アニメ(『読売新聞』夕刊一九八八年四月十五日)
- (4) (2) に同じ
- (5) 野坂昭如「アニメ恐るべし」
- (『スタジオジブリ作品関連資料集Ⅱ』一九九六年八月 徳間書店)
- (6) 栗坪良樹「火垂るの墓——(生き恥)のはじまり」
- (『国文学解釈と鑑賞』三七(七)一九七二年六月 至文堂)
- (7) 菊池昌典「野坂昭如 昭和一桁世代の反国家的原型『火垂るの墓』と戦争体験」
- (『國文學・解釈と教材の研究』一九(一五)一九七四年二月 學燈社)
- (8) 大堀敏靖「火垂るの墓」「アメリカカひじき」——野坂昭如と戦争・ナシヨナリズム」
- (『群系』第三五号二〇一五年十一月 群系の会)
- (9) 米村みゆき「火垂るの墓」解説『焼跡』から敗戦・戦後を問う

- (1) 『文学で考える〈日本〉とは何か』二〇〇七年四月 双文社出版)
- (10) 野坂昭如「焼け跡闇市派宣言」(『新戦後派』一九六九年三月 毎日新聞社)  
この野坂の言葉は『新戦後派』『焼け跡闇市派宣言』のみならず、『プレイボーイの子守唄』でも内容が重複して掲載されている。
- (11) 野坂昭如「母国語がおろそかになれば、即ち植民地」  
『この国のなくしもの―何がわれらを去勢したのか―』一九九七年八月 P H P 研究所)
- (12) 岩佐壯四郎「火垂るの墓」第二章「父の従弟の嫁の実家」  
(田中実・須貝千里編著『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ5) 一九九九年七月 右文書院)
- (13) (1) に同じ
- (14) (9) に同じ
- (15) 中島康二「境界の狭間に位置するもの―『火垂るの墓』を精読する―」  
(『京都教育大学国文学会誌』(三三) 二〇〇六年六月 京都教育大学国文学会)
- (16) 東京都養育院編『養育院八十年史』二六九頁(東京都養育院 一九五三年一月)
- (17) 石井光太「孤児院」(『浮浪児1945―戦争が生んだ子供たち』  
平成二十九年八月 新潮社)
- (18) 妹尾河童 野坂昭如「少年の眼に映った「死」と「飢え」第六節「二歳四ヶ月と九ヶ月で逝った二人の妹たち」(『少年日と少年A』一九九八年八月 P H P 研究所)
- (19) 『オール讀物』昭和四十二年十月号(文藝春秋 一九六七年九月)
- (20) 海音寺潮五郎「第88回(昭和6年年度下半期) 直木三十五賞 選評」  
「描写に卑しさが無い」(『オール讀物』一九六八年四月号 文藝春秋)
- (21) 鈴木琢二氏は、次のように述べている。  
「まるまる一段落がけずられたことがわかる。そして加えられたのが、きわめて具体的な九月二十二日午後、という日付である。これにどんな意味があるのか。けずられた方の理由は、おそらく直木賞の選評にひそんでいようだ。前回と違って「アメリカカひじき」「火垂るの墓」はほとんど全会一致の満票を得ての受賞だったが、海音寺潮五郎は作品を認めつつもある注文をつけている。―結末は明治調すぎて、古めかしすぎて乗って行けなかった。自伝的なものがありそうだから、こうせざるを得なかったのだろう。―おそらく野坂さんはこれに反応したものと思われる。」(鈴木琢二「もうひとつの『火垂るの墓』(追悼野坂昭如)」(『新潮45』三五(一) 二〇一六年二月 新潮社))
- (22) 石坂洋二郎「第88回(昭和6年年度下半期) 直木三十五賞 選評」

「つたえ」を感じさせる作家」(『オール讀物』一九六八年四月号 文藝春秋)

(23) 源氏鶏太「第28回(昭和28年度下半期)直木三十五賞選評」(二人に賛成)

(『オール讀物』一九六八年四月号 文藝春秋)

(24) (1) に同じ

(25) 平成二十二年五月号の『オール讀物』で「火垂るの墓」は、初出版が掲載されている。前掲論文(註(2))で鈴木氏は、次のように述べている。

「ところがここで、もう一度どんでん返しが待っていたのだ。「オール讀物」平成二十二年五月号は創刊八十一年の記念号、編集部は八十年の歴史を飾った名作のひとつとして「火垂るの墓」を再録するのだが、この時野坂さんは新潮文庫版ではなく、オリジナルの再録を許したのである。おそらく「火垂るの墓」の版が新しく組まれたのは、これが最後と思われるが、ここに至ってオリジナル版が復活したことに深い意味があるのか、今とってはもう知るすべはない。／もちろんこの号は、あくまでも「オール讀物」の再録が主旨だから、それを尊重して許可したというのは、大いにあり得るのだが、井伏鱒二が晩年にいたって名作「山椒魚」に手を加えたように、野坂さんの心にも、何か変化があったのではないか。」  
作品末尾の加除にどのような効果があったかを考察する為、本稿では、再録された「火垂るの墓」が初出版であったことには言及していない。再録された「火垂るの墓」が

初出版であったことについては、引き続き研究していく。

#### 参考文献

池田清『重巡摩耶』(二〇〇二年一月 学研M文庫)

石井光太『浮浪児1945―戦争が生んだ子供たち』(平成

二十九年八月 新潮社)

伊藤隆・佐々木隆・季武嘉也・照沼康孝編『真崎甚三郎日記』

(一九八七年一月 山川出版)

伊藤忠「『火垂るの墓』論―おぞましい〈劇空間〉の隠れた作者―」

(『日本文学』三六(八) 一九八七年七月 日本文学協会)

伊藤正徳「連合艦隊の最後」

(『昭和戦争文学全集8 連合艦隊かく戦えり』昭和三十九年

十月 集英社)

岩佐壯四郎「『火垂るの墓』を読む」

(田中実・須貝千里編著『新しい作品論』へ、〈新しい教

材論』へ5) 一九九九年七月 右文書院)

越前谷宏「野坂昭如『火垂るの墓』と高畑勲『火垂るの墓』

(『日本文学』五四(四)二〇〇五年三月 日本文学協会)

大月隆寛「はだしのゲン」や「火垂るの墓」に涙したアナタ

へ

「戦争＝悲惨」という図式の貧困」

- 〔正論〕(四二八)二〇〇七年一月 産経新聞社)
- 大堀敏靖「火垂るの墓」『アメリカカヒジキ』―野坂昭如と戦争・ナショナルリズム
- 〔群系〕第三五号二〇一五年十一月 群系の会)
- 菊池昌典「野坂昭如 昭和一桁世代の反国家的原型『火垂るの墓』と戦争体験」
- 〔國文學・解釈と教材の研究〕一九(一五)一九七四年二月 月 學燈社)
- 栗坪良樹「火垂るの墓」―〈生き恥〉のはじまり
- 〔國文學解釈と鑑賞〕三七(七)一九七二年六月 至文堂)
- 清水節治「戦災孤児」の神話:「火垂るの墓」とその作者」
- 〔日本文学誌要〕三六一九八七年三月 法政大学)
- 助川徳是「火垂るの墓」文体模写で(野坂昭如と井上ひさし):
- 〔野坂昭如・作品論〕
- 〔国文学 解釈と教材の研究〕一九(一五)一九七四年二月 月 學燈社)
- 〔スタジオジブリ作品関連資料集Ⅱ〕一九九六年八月 徳間書店)
- 鈴木貞美『日本の文化ナショナルリズム』(二〇〇五年二月 平凡社新書)
- 鈴木琢二「もうひとつの『火垂るの墓』―追悼野坂昭如」
- 〔新潮文〕三五(二)二〇一六年二月 新潮社)
- 妹尾河童『少年H上巻・下巻』(一九九九年六月 講談社文庫)
- 妹尾河童 野坂昭如『少年Hと少年A』(一九九八年八月 P H P 研究所)
- 高木惣吉『太平洋海戦史』(一九四九年八月 岩波新書)
- 高橋陸郎・塚本邦雄・清水多吉・片岡啓治・佐々木孝次・森茉莉・野坂昭如
- 『われわれにとって父とはなにか』(一九七二年一月 社会思想社)
- 高畑勲「映画を作りながら考えたこと」一九九一年八月 徳間書店)
- 帖佐勉「軍国少年はこうして作られた」(二〇〇八年五月 南方新社)
- 東京都養育院編『養育院八十年史』(東京都養育院 一九五三年一月)
- 中内敏夫『軍国美談と教科書』(一九八八年八月 岩波新書)
- 中島康二「境界の狭間に位置するもの:『火垂るの墓』を精読する」
- 〔京都教育大学国文学会誌〕(三三)二〇〇六年六月 京都教育大学国文学会)
- 野坂昭如「焼け跡闇市派宣言」(『新戦後派』一九六九年三月 毎日新聞社)
- ――『エッセイ集1 日本土人の思想』(一九六九年二月 中央公論社)
- ――『アドリブ自叙伝』(一九八〇年二月 筑摩書房)
- ――『新潮現代文学』3 エロ事師たち・火垂るの墓
- 野坂昭如』(一九八一年十一月 新潮社)
- ――『この国のなくしもの―何がわれらを去勢したのか』(一九九七年八月 P H P 研究所)

——『野坂昭如コレクション1』(二〇〇〇年九月  
国書刊行会)

——『野坂昭如コレクション2』(二〇〇〇年十一月  
国書刊行会)

——『野坂昭如コレクション3』(二〇〇〇年一月  
国書刊行会)

——『野坂昭如リターンズ4』(二〇〇三年十一月  
国書刊行会)

——『戦争日記』を読む』(二〇一〇年七月 朝日文  
庫)

——『マスコミ漂流記』(二〇一五年十月 幻戯書房)  
——『俺はNOSAKAだ ほか傑作選』(二〇一六年八

月 新潮社)

正岡茂明「甲陽園地下壕、火垂るの墓、そして今後」

——『歴史と神戸』三九(六)二〇〇〇年十二月 神戸史学会)  
松本三之介『明治思想集1』(一九七六年三月 筑摩書房)

松本善明『軍国少年がなぜコミュニニストになったのか』(二〇  
一四年五月 かもがわ出版)

満永さゆき「野坂昭如『火垂るの墓』における待遇表現」

——『方言・音声研究』(二)二〇〇九年三月 方言・音声研  
究会)

宮島肇『戦後思想の社会史』(一九六八年七月 法律文化社)

吉田裕『日本の軍隊―兵士たちの近代史―』(二〇〇二年一二  
年 岩波新書)

米村みゆき編著『ジブリの森へ』(二〇〇八年四月 森話社)

## 附記

本稿は、創価大学日本語日本文学会「令和元年度年次大  
会」(二〇一九年一月一五日 於、創価大学)における  
研究発表をまとめたものである。席上、さまざまな御質問  
や御教示を頂戴した。記して感謝したい。

(とくなが・あつし、創価大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士後期課程)